

# 北神塾

## 第2講「国家の物語 ―なぜ政治を志したのか―」②

2014. 6. 20 (金)

前回第1講では、「なぜ政治家を目指したのか」という話をさせていただきました。前回来られなかった方もいらっしゃるので、最初にちょっと復習させていただきますね。

私はずっとアメリカにいた関係から、常に「世界の中の日本」を見てきた。あるいは、国家間の、ぶつかる面や、仲の良い面など、いろいろな面を見てきた体験から、「自分の祖国というのはやはりちゃんとしてほしいな」と。ある意味では素朴な感情から、ずっと国の仕事をしたいなと思ってきたわけです。

もう一つ申し上げたのは、「国家」という言葉と、「国民」という言葉があります。よく、その二つから「どちらを選ぶのか」と、「国民より国家」、「国家より国民」とか、そんなことを言いますが、前回のお話では、「国民と国家は一体でなければいけない」と申し上げました。特に民主主義、今の日本国憲法もそうですけれども、国民主権、つまり国民が選挙を通して政権を作って、その政権が官僚を動かすと。一応、建前はね。逆に官僚に動かされている所もありますけど、建前としては、やっぱり国民が選んだ議員さん達が、いずれ誰かが総理大臣になって大臣を選んでやるわけですから、国民が主権なんですね。一番権力があるのは国民なんです。政権を作ることも出来るし、倒すことも出来るんですね。すごい権力を国民は持ってるんですね。だからこそ、民主主義においては、国民主権の政治においては、特に国民と国家というのが一体であるわけですね。「国家 VS 国民」とか、そんなものは無いわけですよ。国民が

国家を作っているということです。だから国家というのは大事なんですね。そこで、「愛国心」という言葉をあんまり使っちゃいけないと言う方もいますが、私はそういった意味では、大事なことであるということも申し上げました。むしろ愛国心が無ければ、民主主義というのは健全に機能しないと。皆さん、お子さんやお孫さんが生まれたりしたら、愛情を感じますよね。愛情を感じると、責任感が出てくるわけですよ。愛情が無ければ責任感なんて生まれないわけですね。「どうでもいい」ということになってしまう。ですから、民主主義で国民主権で自分の国について何か投票して判断をする時に、やっぱり自分の国を愛して、そしてそれによる責任感を自分の国に持っていないと、間違った、おかしい投票結果になってしまう恐れがある、ということも申し上げました。ただ「愛国心」と言ってもね、これは危険な部分も確かにあるんです。皆さん学校で、先生が一年生に「愛国心を持ちなさい」とか何とか急に言ってもね。そんなことピンと来ないしね、子供さん達は。「お前は愛国心が無いんだ」とか、「これをしなければ愛国心が無い」とかね、こういう一種の差別みたいなことにもなりかねませんので、「どうやって健全な愛国心を育むか」というのが今日のテーマです。

愛国心というのは、自分の国を愛するという事なんですが、ただ単純に、「この国に生まれたから愛する」ということだけじゃなくてね。やっぱり「自分の国は素晴らしい、立派な国であるから自分の国を愛する」というのが無いと、私は健全な愛国心にならないと思っています。それを私は「国家の物語」という言葉で表してしましてね。日本の、我々の先人達がどういう日本を目指してきたのか。世界の中で、どういう国を目指してきたのか。この国の物語というものをしっかり自分達の腹に落としていくことが、健全な愛国心につなが

っていくという風に思います。

この「国家の物語」ですが、両極端あるんです。「完全に自分達の国は悪いことばかりしてきた」ということを強調したがる人ね、巷で言う「自虐史観」というものですけども。「日本はほんま悪いことした、日本はほんまあかん国や」と、こんなことばかり言う人達もいるし。またその反極には、「お国自慢史観」。何でも「日本がやったことは素晴らしい、どの国よりもすごい」ということを言うと。やっぱりね、誰でも、自分の彼女でも旦那さんでも子供でも、ただ溺愛するっていうのは問題なので。やっぱりいい面も見ないといけないし、悪い面も見ないといけないし。過去に間違っただけを繰り返さないと、それを反省して、次はそういう過ちを繰り返さないということもしないといけない。そこがやっぱり大事なことです。

今日本は、北朝鮮の問題とか中国の問題とかで非常に、ある意味では愛国心が盛り上がってきているところもありますが、ここはものすごく気を付けないと、変な方向に行ってしまうと思います。そこもお話をしたいと思います。

愛国心というのは常に、どの時代でも大事ですけども、なぜ今、この二十一世紀の日本で更に大事なのかと。これはね、我が国の最大の課題は何なのかというところにあります。国内においては、今はアベノミクスということでちょっと株が上がったり土地が上がったりして、非常に皆いい雰囲気になっておりますが、根本の日本の危機的な状況は何も変わっていないんですね。多分皆さんもそれは薄々感じててね。酒を飲んでも何も考えずに踊れるような状況じゃなくて、ワイワイ騒いでるけどどこかで「こんなことしとっていいのかな」と、「何か景気がいいとか一部で言ってるけど、自分達はあんまり関係ないな」

とか。あるいは多少関係していて、自分が持っている株が上がっても、「こんないつまで続くのかな」という不安も同時にあると思いますが、これはやはりね、国の財政事情ですね。これはもう非常に厳しい状況でございます。これについては後日、この北神塾でも財政について…一応私も大蔵省にいましたんで、ここは一番専門なんですけど。財政の話もさせていただきますが、非常に厳しいと。厳しいってどういうことかと言うとね、簡単に言えば、皆さんから税金を大体毎年40兆円くらいから50兆円くらい頂いてるんですね、国が。これは「入り」ですね。で、出る方は大体90兆円くらいですね。だから50兆円から40兆円くらいは借金なんですね。一番簡単に問題は何かと言うと、今まで40兆円お金を頂いて、それを教育に充てたり年金に充てたり、中小企業の対策に充てたりね。道路に充てたりしていたのが、お金を借金の返済にどんどん回さないといけなくなる。今大体、入ってきているお金の40%は借金の返済に回してるんですね。そしたらどんどん財政が圧迫されてくるわけですよ。本来国民のために使わないといけないお金が、借金の方に回さないといけないようになってくる。しかもそれは、世代が若ければ若いほど、国民のために使えるお金が少なくなっていくということですね。

あともう一つ、一番怖いのが、「日本売り」ですね。「財政があかん」と世界の投資家達が日本の国を見捨てることもあり得るわけですね。そうなったらどうなるかと言うと、外国人が持っている株とか国債とか土地っていうものを、一斉に売り出していくということになりますね。皆さんにしてみたら、「外国人なんか株でも土地でも、一部しか持ってへんやん。そんなん多少値段が下がるくらいで、別に大したことないやろう」と思われるかもしれませんが、例えば今の株売りの、7割～8割は外国人なんですよ。つまり日本の金融、株式と

か土地とか、そういったものは大体外国人主導で動くんですね。外国人が買い出したら日本人も買い出して、株が上がる。外国人が売り出したりするとまた日本人も売り出す、というのが大体のパターンなので、持っているのが1割〜2割くらいだったとしても、外国人の売り買いの行動っていうのはものすごく日本の金融、資産市場に影響するということです。だから、「日本の財政がやばいな」と外国の投資家がみんな一斉に売り出したら、株も暴落、国債も暴落、土地も暴落、通貨としての円も暴落…今の円安どころじゃないですよ。完全に価値が紙屑みたいになってしまう。昔アルゼンチンとかね、そういった国で起きたようなことが日本でも起きるといえることです。ですから、そういった意味で財政というのは非常に厳しい。

この財政を一番厳しくしているのは、医療、年金、介護なんですね。実は一番お金を使っているのが、医療、年金、介護で。これはもう少子高齢化でしょうがないんですわ。お年寄りが増えるから、どんどん医療も年金も介護も、どんどんお金を使わないといけない。皆がそんなに病気をしなくても、お年寄りの人口が増えることによって、自動的にお金がどんどん無くなってしまいます。これも後日詳しく説明しますが、他の予算、教育とか防衛とか、公共事業とか、こんな予算は、日本が皆さんの税金を使っている割合というのは、世界でも極めて少ない。やっぱり社会保障にほとんど借金を使っているというのが現状です。ですから、医療、年金、介護というのが破綻をしてしまう、あるいはもう既にしているじゃないか、というような問題もございます。その根本にあるのがやっぱり人口問題ということ。

人口というのは、これはもうどうしようもないです。今から30年、40年前に分かっていたことですが、政府は結局何も対策を打たずに今まで来ました

ので、今からでも少子化対策はやるべきだと思いますが、やったところで人口が増えるまでには、あと50年～60年くらいかかります。もう遅いのが現状ですね。ですからこの人口問題のために、いくら株を無理矢理上げたとしても、京都の地元の人口はどんどん減って、そしたら地元の商店街とか、地元の中小企業というものが非常に厳しい状況に陥ってしまうと。国内だけを見ても、このくらいの問題を抱えているんです。これは大変な問題で、先進国でも日本が最先端を行ってるんですね。最先端に行くのは大抵いいことなんですけど、日本は悪いことの最先端を行っているんですね。これが、国内の問題。

国外の問題は、前もお話ししましたが、まあ中国が大国になって、非常に日本に対して…日本人側にしてみたら、挑戦をされている状況ですね。あと北朝鮮の問題ももちろん言わずもがなですね。ですから、今まで日本が抱えてきた問題の中でも…少なくとも戦後ね、いろんな問題ありました。公害の問題、石油ショック、いろいろございましたが、これが多分、戦後の日本が直面する最も厳しい状況です。

今までは、経済がどんどんいい時は税収がどんどん入るわけですよ。そしたら国というのは何をするのかというと、どんどん入ってくる、余った税金を皆さんに配るわけですよ、いろんな形で。医療、年金も配ってるわけですね。地元の公共事業に使うのもお金を配っている。教育にも配っている。つまり、いいことづくめなんですよ、戦後はね。

ところが今はもうどんどん経済も弱って人口も減っていると。そうすると、もう借金しか出て来ない。だから、例えば消費税の問題ね。これは皆さんにも非常にご迷惑をお掛けしていますが、消費税での負担。ですが8%、10%く

らいでは、とてもこの財政状況というのは改善されません。今後どうしていくのか。まあ消費税を増やすのか、あるいは医療、年金、介護を削るのか。これ「削る」って簡単に言いますが、年金生活者の方にしてみたら、「何だ」となりますよ。「今まで私は月8万円の年金で人生計画を立ててたのに、それを6万円にするのか？」とか。こういう、皆さんにとっては非常に嫌な、不快な話ばかりですね。

あるいは中国、北朝鮮の問題も、場合によっては紛争、戦争…これはまさに、人の命を犠牲にしないとイケないような局面になってしまうかもしれない。ですから今ここで書いてあるようなことは、要はそれぞれがちょっと我慢をしないとイケないとか、もうちょっと言えば、自分を多少犠牲にしないと、解決できない問題なんですね。何でもいいとこ取りで、自分は何も痛まないというような状況ではないということです。

だから皆、レジュメに書いてありますように、自分の生活だけのことじゃなくて、先ほど言った愛国心の本質である、国民全体、国家のためにいかに自分が貢献していけるか。あるいは我慢をするのかという、こういう局面がこれから更に多くなっていく、ということです。だからこそ私は、「国をいい意味で愛する」というのは、そういったところからしか出て来ないわけですよ。「自分さえ良ければいい」、「自分の地域さえ良ければいい」のだったら、「何で私がそんなに犠牲にならないとイケないんだ」という発想になってしまうので。これでは財政問題、人口問題、社会保障の問題、外交の問題っていうのは全く解決出来なくなってしまう。そういった意味で、今日は、「健全な愛国心というのは何か」ということで、国家の物語ということをお話ししたいと思います。

この「国家の物語」というのは何なのかというと、レジュメにもありますが、これは「自分達の国と国民が、これまでどのような思いと志を持って国を支えてきたかという物語」なんですね。これは自分に置き換えてもらったらいいと思います。皆さんの、自分の一生を。私は何を目指してきたのか。それぞれ自分の物語があると思います。「こういう仕事や家庭を私は目指してきた」と、「ここで挫折をした、けれどもそれをこうして乗り越えた」とか、いろんな自分の物語があると思います。日本の国全体としてもそういう「国の物語」というのがあって、これを皆で共有するということが大切です。もちろんそこで、間違っただけでもしてるし、悪いこともしてます。自分を見てもそうです。自分の物語でも、必ずしも常に立派なことだけじゃなくて、「こんなずるいこともしたなあ」とか、「こんな悪いこともしたなあ」と、いろいろあります。これを全部ひっくるめて、自分達の物語に愛着を持ち、自分達のものにするというのが、健全な愛国心だという風に私は思っています。

レジュメに「国家の物語はなぜ必要なのか」とありますが、これは今申し上げたような、「財政問題、人口問題、外交防衛問題、これらの課題を乗り越えるために我が国の物語に共鳴をして、自分達もその思い、日本の国の思いと志というものを引き継ぎたい」と。「今後も、今までの我々の先輩達がこういう日本を作ろうとしたので、自分達もその思いを、あるいは志を引き継ぎたい」という、この共通の思いというのが私は大事だと思っています。

じゃあその「国家の物語」の内容というのは何なのか、ということですが、私は一言でレジュメに書いていますが、「日本という国は、どんなに強大な国



にも屈服せずに、常に対等の立場で独立を守ってきた国」なんですね。これが私は日本の国の物語だと思うんです。これ書いてませんが、もっと言えばね、中国であろうとアメリカであろうと、「我々は対等の国ですよ」ということを、日本というのはずっと主張してきたんですね。ところが日本だけじゃなくて、世界の他の国の中でもちょっと弱い国とか、いじめられている国。こういった国に対しても、やっぱり皆「お互い共存、共栄をする、平等な世界というものを日本という国は目指してきた」、という風に私は思っています。

こういったことを、日本人はほとんど、自分達の歴史をそういう風に理解していないと思うんです。素晴らしい志を持ってきた国なので、それを簡単に…私も歴史家ではないですけど…「えらい昔からやな」と皆さんうんざりされるかもしれませんが、古代からちょっと簡単に箇条書きにしていますので、それに触れていきたいと思います。

もう一度言いますと、我が国はどんなに強大な国にも屈服せずに、独立の気概で対等なおつきあいをしてきた、それを目指してきた国なんですね。これは、古い話ですが、聖徳太子まで遡ります。当時の中国、隋の帝国がありました。隋の帝国は、当時の日本とは国力の差どころじゃありません。もう全く敵わないくらいの文明の水準、軍事力、経済力を誇っていた。日本なんかは、当時聖徳太子ですから、法隆寺で見られるような、ああいう雰囲気だったと思います。東洋の田舎の島、みたいな。当時の中国の都なんかに行くと、それはもう世界中のいろんな人種がシルクロードから来てね。アラブのモスクも建ってるし、いろんなものがあって。それはもう全然話にもならないくらいの違い。他のアジアの国は、皆大体中国に対しては、「これから親分としてご指導ください」と言っていたんですね。ところが、日本の聖徳太子という人は…日本の歴史で

一番偉い政治家だと私は思うんですが、彼の外交方針によって宣言された国是というのは、「日出る国の天子」ですよね。「日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す」と。つまり、「お互い平等やで」と。「対等ですよ」ということを聖徳太子は宣言するわけですよ。これは皆さん、何となくご存知だと思いますが、これはえらいことなんですよ。その証拠にね、隋の煬帝という皇帝がいたんですね。この人は最初、疑うわけですよ、その手紙を。「こんな島国の倭の国が、何か知らんけど、皇帝である俺と同じように、自分のことを『天子』だと言ってる。何かの間違いじゃないか!？」と疑うわけですよ。というのは、そんな国は未だかつて中国は接してきたこと無いんですね。皆下手に出てきて、「朝貢関係を結びたい」、「あなたが親分で、私は子分です」と。「だからあなたの言うことは何でも聞きます」、と言われるのが大体の中国の外交関係だったのが、初めて聖徳太子率いる日本が、対等な外交を申し込んでくるんですね。中国はこれを疑ってね、使者を送るわけですよ、日本に。「この国は何かちょっと間違っとなのか無知なのか…あるいは狂ってるのか、何なのか」ということを調べさせるわけですよ。そしたらまた聖徳太子が、今度は同じような文章で、中国の皇帝に対して自分のことを「倭皇」と言ったのかな。「皇帝」の「皇」は使っちゃいけないんですよ、中国の皇帝しか。それ以外は「王様」なんですね。中国の皇帝は、王様の中の王様っていう意味なんです。中国人は自分の領土だけじゃなくて、世界が皆自分達の部下だという発想を持っている。「中華思想」ですね、いわゆる。まさに「中国」です。世界のど真ん中にある、中心にある国という意味ですから、「中国」というのは。ですからそういったことから疑うわけですけど、聖徳太子は本気、正気だし。その辺の何か夜郎自大的な、訳の分からない田舎のおっさんかという、聖徳太子というのは極めて中国の仏教とか漢文とか、こういったものを高度に習得している、最高のインテ

りみたいな人ですよ。あの人はいろんな法華経とか仏教の経典の解釈を書いていますけど、中々あの時代では比べ物にならないくらい、大陸、中国の教養を持たれていた人です。その人がこういう外交方針を宣言したんです。

それは古代の話ですけど、明治以降の最近の話になりますと、明治以降は自分達の国だけではなく、「どういう世界を実現したいのか」という構想を日本は持っていました。それは、「どんな国であろうと差別無く共存共栄すべきだ」という国際社会を実現しよう」というもので、そう頑張ってきたんですね。レジュメにありますように、「先の大戦で悲劇的な敗戦を喫したものの、その廃墟からふたたび立ち上がって、現在もその志を追求している途上にある」と私は思います。国民がどこまで意識しているか分かりませんが、私が政治をやっている上では、こういう…聖徳太子時代の伝統というのを今に継承しないといけないという風に、そういう気持ちで政治をやっています。ちょっと変わってるかもしれませんが。他にこういう人は国会議員にいないかもしれませんが、そういう思いでやっています。

またこの国の物語の中で、日本は強大な国からの挑戦に立ち向かうためには、平時は大体日本の社会というのは平等な社会ですけれども、いざ危機が来た時…例えば戦わないといけないとかね、勝負をしないといけないという時には、強力な指導力を発揮して乗り越えてきたんですね。日本は、大体一人の人があまり偉そうにするのは嫌がるお国柄なんですけど、でもあんまり皆の意見を聞いていたら、外交なんか出来ないんですよ。外交っていうのは、トップ同士がその場で話し合っただけで決めるということをやらないといけないんですよ。ところが日本の総理は今までは、皆の意見を聞かないといけないから、「分かりました、

じゃあ持ち帰って皆さんにご相談してまた返答します」と、こうなるわけですよ。外国では、こんなことはあまり無いわけです。その場で、自分が責任を持ってバシッと決めないといけない。ところが日本でそれをやると、「独裁者」とかね。「暴走している」とか、こういう風に言われてしまうわけですよ。ですから、日本というのは大体あまり一人の指導者が強力な力を持つのを嫌がりますが、「いざ鎌倉」という時にはやはりそういう人をちゃんと輩出して、支えるという国になっていると思います。これが日本の国の物語のざっとしたあらすじです。「それは北神の妄想じゃないか」と、「勝手にお前がでっち上げてるだけじゃないか」という風に言われるかもしれませんが、歴史を追って、お話をしたいと思います。それで、大体の感覚を持っていただければと思います。

まず、レジュメの1ページ目の最後の、1) から行きます。大体日本の国がどういう風に出来上がったかと言うとですね…まあ基本的に、朝鮮半島が中心だったんですね。日本の国にはいろんな人たちがいたけれども、大体朝鮮半島からの渡来人達がいる。自分達の「国家」みたいなものはあまり無かったんですね。朝鮮半島とか中国の方が先にそういう「国家」というものがあつたと。ところが朝鮮半島で、高句麗という国…三韓ありましたが、高句麗は今の北朝鮮の方、北の方の国ですね。その高句麗が、朝鮮半島を支配しようとするわけですね。つまりどういうことかと言うと、朝鮮半島がありますよね。そこに三ヶ国あると。三ヶ国あつた方が、日本にとっては都合がいいんですね。お互い牽制し合いますから。ところがこれが高句麗一国に支配されると、日本人としては、「朝鮮半島を高句麗が全部独占した。次はうち（日本）かな…？」となるわけですね。次は日本を攻めてくるんじゃないかというのが、これは健全な

感覚だと思います。その時に、大和政権というのが、他の地方の豪族を束ねて、統一国家を作っていくんですね。だからそもそも日本の国というのは、朝鮮半島で高句麗という国がどんだんのし上がってきたので、「俺達もあんまりバラバラに、豪族同士で喧嘩したりしてる場合じゃない。ここはちゃんと連合を組んで統一の国家を作らないといけない」という、そこからして日本というのは、対等の気概、意識というのがあるわけですね。

レジュメの2枚目に入ります。2)は先ほどの聖徳太子の話ですが、今度は隋の国がどんどん出てきて、朝鮮半島の三ヶ国は朝貢関係を結ぶんですよ。隋の国には敵わないということで。これもいろんな打算がありますよ。とりあえず立てておいて…中国というのは、とにかく面子が大事なんですわ。だから本当のところは従ってなくても、「親分、親分」と言う。まあそういう人はどこにでもいますけど、そういうところが強いお国柄なんで、本当の奴隷みたいになるわけではなくて、一応立てる、ということだと思いますが。日本は、それさえ嫌だと。そういうことで、ここに書いてあるように、聖徳太子が「日出る国の天子」として対等な外交関係を作っていくと。

次に3)、隋の国の次は唐の国が出てきます。これも強烈な国ですね。その時、日本は戦争に負けるんですね。唐と新羅かな、新羅が連合軍を組んで、高句麗を滅ぼすんですね。その新羅と唐の国が、今度は百済という国をやっつけようとするんです。日本は、中国の唐の国が朝鮮半島を占領しちゃうと次は自分達がやばいということで、今度は百済と一緒に連合して戦争をする。白村江の戦いという戦いで、これは残念ながら負けるんですね。それで、大和朝廷の人達はものすごい危機感を持って、「これやばいな」と。白村江の戦いという

のは朝鮮半島での戦いです。そこで負けて逃げて来たんですが、「今度はこっちに攻めてくるんじゃないか」ということで、いわゆる天智天皇も都を遷す。近江の都というのはその時の都ですね。あんまり海の近くにいると侵略されると。それで、大阪湾の方から遠ざかって、近江の方に朝廷を設けるんですね。そこでいろいろ軍備を調べたりして備えると。

4) の平安時代に入ると、大陸や朝鮮半島で、一国が支配する状況が無くなるんです。わりと緊張感が緩んでしまって、まさに「平安」という言葉通りの平和な時代が来る。鎌倉時代の最初の方までそうですが、あんまり外国からの脅威が無いので、わりと国内でゆったりとする。『源氏物語』とかね。私も今ちょっと読み返してますが、皆恋愛しかしてませんわ、あれ。不倫しかしてないんですわ。「この人達は一体何しとんのかな〜」と…。これは、日本の最高の小説なんですよ、文学的価値で言えばね。でも、内容はただただ不倫しとるだけなんですよ。つまりそれはね、日本は何の危機感も無いわけですわ。別に他から攻められるわけでも無いしね、食だったり、女性との恋愛だったり、それくらいしか無いわけです、楽しみが。そこで日本の「国風化」という、大陸の文化を昇華して独自のものにするというのが平安時代ですけれども。これは誠に危機感の無い時代…実はあるんですよ、何回かちょこっとした侵略はあるんですが、唐とか隋とか、あるいは高句麗みたいな強烈な脅威は無かったんですね。そういう中で緩んでしまったと。

次の5) ですね、その緩んでる間に、蒙古の…いわゆるジンギス・ハンとかね。信じられないような凶暴な英雄がモンゴルの草原から誕生して。このジンギス・ハンっていうのは恐ろしい人ですよ。中国も全部自分達のものにする、

ロシアもやっつける、インドもやっつける。東欧まで行くんですよ。ハンガリーとかね。あそこまで、全部自分の、モンゴル帝国になるんですね。そのジンギス・ハンが今度は日本を狙って来る。まあジンギス・ハンの子孫ですけどね、フビライ・ハンが。またね、日本は強気で…普通の国は「こんなフビライ・ハンと喧嘩したらやばい」となるんです。最初フビライ・ハンも偉そうな手紙を送ってくるわけですよ。「おい日本、俺達はもうユーラシア大陸を全部占領した。お前らも仲良く、ちゃんと俺達の言うこと聞いて貿易でもしようや」と、こういう手紙を送ってくるんですよ。ところが北条時宗は全然相手にしない。返事も送らない。京都の朝廷はビビり始めるんですよ。それまでは日本舞踊とかして毎日宴会だったのが、「もうえらいことや」と。「フビライ・ハンというやつが、攻めてくる可能性があるぞ」と。それで、普通の国だったら、「フビライ様、あなたが偉い！あなたが一番！我々はあなたの言うことを何でも聞きますから、放っておいてください」と言うところを、日本というのは、北条時宗が「だめだ」と。それで、これもまたモンゴルから…これも隋の煬帝と同じでね、フビライ・ハンには理解出来ないんですよ。返事も来ないわけですね。それで一度攻めてきたけれども失敗に終わった。

その後も元がいろいろスパイとかで探りを入れると、日本は「全然お前らなんか相手にしない」と言ってくるわけですよ。そしたらモンゴルは「こいつらはまともな国か？」と、「正気かな？」と思って、韓国の使者を送って、日本にモンゴルの使者と一緒に「ちょっとお前、手紙読んだんか？」と言った。そしたら何をするかというと、北条時宗はその人を切り殺すんですよ。有無を言わさず。もう、「こいつらは本当に喧嘩売ってくるのかな」と、蒙古は思うわけですね。「まともかな、この国は？」と。「俺達は中国をやっつけた。インドをやっつけた。ロシアをやっつけた。ヨーロッパももう震え上がっている。な

のに、この小さな島国が本気で俺達に喧嘩売ってるのか？」ということで、もう一回使者を送るんですよ。ほな、もう一回殺すんですね。で、「これはもう許せん」っていうことで再び蒙古襲来になるんですが、これは自然の摂理に守られた部分もあるけれども、ある意味では日本の精神というのはそういうものでね。「どんな国でも対等にやるんだぞ」という。これは他の国にはあんまり無いくらいの気概があったと。これはもちろん、日本海に守られてるとか、地理的条件があるんですよ。ですから、何も日本が一番偉いとかいう意味じゃなくて、そういう地理的条件の中で、そういう文化を育てて、そういう志をずっと持ち続けた国であるということです。それで、元は2回来て、2回とも逃げて帰っちゃうわけですね、台風が来たりして。

次、6) ですが、室町幕府になります。今度は、蒙古の国が滅びて、明の帝国が中国に誕生すると。ところが明の国っていうのはね、わりと平和的な外交で、あまり侵略的なことをしなかったんですね。そういうこともあるし、また金閣寺を作った足利義満さんっていうのは、日本の歴史で唯一、朝貢外交っていうのをやるんですね。つまり、今までは対等な関係しか認めなかったのに、義満は朝貢関係に入るんですね。ですから、明も満足ですね。「日本もちゃんと従順にやるんだな」と。そういう中で、また緊張感が無くなってね、平安時代と同じように…これは室町の最後の方ですけど、この京都なんかはもう荒れててね。一条兼良という人が日記を書いていますけれども、日々強盗、暴動で、全く夜道を歩けないというような。そういう無政府状態に日本の国はなっていくんですね。これは外国からの緊張が全く無いので、そういう状態になって来て。それでその無政府状態の究極が戦国時代。軍閥割拠で、いろんな地域に、「俺が大將だ」っていうような人達が出て来て、それぞれが天下を争うという



状況になります。

次の7) ですが、天下取りの戦国時代の中で、スペインとポルトガルから、ザビエルとか宣教師が来るんですね。これ、非常に大きいんです。今の歴史では、単にザビエルが宣教師として来て、隠れキリシタンがどうか、そういう歴史しか勉強しませんが、実はこの宣教師というのは、植民地支配の先兵なんですよ。つまり、この人達はキリスト教を持って来て、そして同時に、その国の情報を母国に報告して、「この国はこうやったら攻められるぞ」と、そういうことをやった人達なんですね。だから、大体九州は皆キリスト教にかぶれちゃってね、「キリスト教大名」みたいなのが出て来て。それで、長崎の一部の土地なんかを売ってるんですよ、教会に。秀吉はそれに怒ってね、取り返すんですけどね。そのぐらい、宣教師っていうのは、スペイン、ポルトガルの植民地支配のすごい勢力だったんですね。私は信長とか秀吉っていうのは、そういうことを分かってたと思うんですね。だから信長なんかは、結構外交とか、世界の中の日本というのをよく考えられていたし、それをそのまま実行したのが豊臣秀吉さんで。これは、彼が何を考えたかということ、日本は大陸にどんどん侵略をして行って、中国、そしてインドまで自分の国にしようとしたんですよ、秀吉というのは。これまたとんでもない人なんですけどね。何で彼はそういうことをしたのか。何も、侵略が好きだとかそういうわけじゃないんですよ。彼は、そこまで支配して初めて、スペインとポルトガルを牽制すると。「攻撃は最大の防御」という言葉がありますが、ただ日本でこじんまりしていて、向こうが攻めてくるのを待つだけじゃなくて、こっちから打って出てインドくらいまで行ったら、ポルトガル、スペインというものを牽制することが出来るという、こういう発想でやって。それで、悪名高き朝鮮征伐というのを2回に

渡ってやろうとするわけですね。これは大失敗に終わって、這う這うの体で戻って来て。秀吉ももう最後は老いぼれた老人になって、自分の子供の鶴松のことしか考えずにね。最期に「露と生まれ 露と消えにし わが身かな 難波のことも 夢のまた夢」と、非常に感傷的な歌を辞世の歌として詠んだんですけども。そういう終わりを告げてしまうと。

8)、次は家康ですね。彼は秀吉みたいにどんどん打って出るような外交戦略じゃなくて…鎖国とよく言いますが、厳密に言えば鎖国じゃないんですね。管理貿易、管理外交をやるんですね。一部の国としか、世界では付き合わない。オランダ、あと中国の一部と、朝鮮の一部とだけ。朝鮮とは…家康というのはやはり、朝鮮征伐の時に外交関係が非常にまずくなったから、やっぱりちゃんと仲良くしないといけないということで、通信使という制度で外交関係を結ぶと。それ以外の国とは一切付き合わないという。それと同時に、いわゆるキリスト教の弾圧をするんですね。そしてスペイン、ポルトガル…当時になって来ると、イギリスとかも出て来るんですが、こういった国が日本を植民地支配しないように、管理貿易、鎖国体制というものを作っていく。これも一種、「俺達は屈服しませんよ」と、「日本は自主独立の国であって、対等に渡り合えますよ」という家康の外交方針ですね。

続いて9)、この徳川時代も、平安時代と同じようにね、また墮落するわけですよ。元禄時代とかね。何の危機も無い、ただ天下泰平の春を謳歌するような時代が続くんですが、だんだん徳川時代の後半に入るとですね、ロシアが北方の方を狙ってくる。あと西洋列強、イギリスとかフランス、極めつけはアメリカから黒船というのが来て、その後は皆さんご存知の通り。そこでやっぱり

日本も、だらけてたのがまた引き締まり始めて、幕末、明治維新の時代に突入をしていくと。結局これも、「黒船とか、イギリス、フランスの植民地支配には日本人は屈服しません」と。屈服しないためには、日本の国の文化を守るけれども、外国のものも取り入れてね。ちゃんと互角に渡り合えるように自己改革をするんですね。これが明治維新ですね。

明治維新ではそういう国を作っていくんですが、その流れの極致が、やっぱり 1904 年の日露戦争ですね。10) です。この日露戦争というのも、皆さん何となく知ってますけど、これもえらいことで。それまで世界の歴史の中で、欧米のいわゆる白人に、黄色人種はおろか、有色人種…要するに「白人以外の人種が白人に勝つ」ということは、もうそんなことはあり得ないと。「そんなことは、天地がひっくり返ってもあり得ない」と。「悔しいし残念だけれども、やっぱり白人というのは一番世界で強くて偉い、賢い人種だ」というのが当時の常識だったんですね。ところが日本というのは、この日露戦争で、初めて有色人種が白人に勝つんですよ。これを、ベトナムのお百姓さんが「万歳」とやるわけですよ。つまり、「自分達も出来るんだ」と。「日本人がロシアに勝てるんだったら、自分達ベトナムだってフランス人をやっつけられるんだ」と。ベトナムはフランスにいじめられてましたからね。なんとね、アメリカの黒人の団体からも手紙が来てね、日本に。「あんた達は素晴らしい」と。「我々黒人に希望を与えてくれた」と。「我々黒人は絶対白人には敵わない、そういう風に叩きつけられてきた。でも、あなた達が日露戦争に勝てたのを見て、我々もやれば出来るという希望を与えてくれた」という手紙が送られてくるくらい、この日露戦争というのは、世界の歴史を変える出来事だったんですね。こういうことを私は、もっと日本の皆に伝えるべきだと。そのくらい日本の国っていう

のは、世界の歴史を転換するくらいのことをやってきてるんですね。

ところがその後がちょっとまずいんですわ。日露戦争まではよかったんだけど…日本人はね、最初は謙虚なんだけど、ちょっと成功するといちびってしまうんですよ。傲慢になっちゃうんですよ。緩んでしまっただけね。日露戦争までは緊張感があって脇が締まってるね。「ロシアなんか関係ねえよ！」とか、そんな姿勢じゃないんですよ。「ロシアは手強い。だから慎重に戦略を考えて、他の国、アメリカともイギリスともちゃんと仲良くして…。で、ロシアでちょっと勝ってる時に早くアメリカに仲介に入ってもらって、戦争を終わらせよう」というね、非常に緻密な、堅実な外交をやるんですね、日本は。ところがその後は皆ね、「もう怖いものは無い！」とね。「ロシアもやっつけたし怖いもの無しだ」と。そこで軍部が偉そうにし始めるようになって。…そこから、朝鮮半島、大陸に戦略も無く、ただ「日本はすげえ国だ」という驕り高ぶった、蒙昧な気持ちでどんどん入って行っちゃってね。せっかく日露戦争でああいう世界的なことをやったのに、台無しにしてしまうんですね。

ただ、11) に少しありますが、その真只中でも私は誇るべきこととして、第一次世界大戦後…これはヨーロッパでドイツとかイギリスが戦争してね。日本もまあイギリスと同盟を組んでいましたんで、これもまたどさくさまぎれに、ドイツの青島（チンタオ）という中国の植民地を奪ってしまうんですね。そういうことがあって、戦後処理で第一次世界大戦の後、領土をどうやって振り分けるかというパリ講和会議に、京都の西園寺公望というのが代表で行くんですね。そこで交渉するんですが、その交渉の中で、日本が初めて「人種平等主義」というものを掲げるんですね。これは要するに、「どんな人種であろうと、ど

んな宗教であろうと皆平等であるべきだ」という理念を、西園寺公望を初め、日本の使節団が外交の場で宣言するんですね。それまでは、そんなことは無かったんです、一回も。でも日本がそれを初めてやる。日本も思いがあるんですよ。日本は日露戦争の前に、1894年に日清戦争というのをやって、そこで清、中国に勝つんですね。当時の常識に則って、満州や遼東半島などをもらうわけです、中国から。そしたら、「三国干渉」と…レジュメにも書いてありますが、ロシア、フランス、ドイツ。この三ヶ国が、「おい、ちょっと待った」と。「日本は戦争に勝ったかもしれないけど、お前らにその領土はあげない」と、急に、当事者じゃない第三者の国が割り込んでくるわけですよ。当時は日露戦争の前ですから、1894年。明治維新が1868年ですから、まあ20~30年しか経ってないんですね、近代化し始めて。だから当時の人達は賢くて、「こんなところで威勢を張ってロシアとフランスとドイツなんかに戦争してしまうとえらいことになる」ということで、「臥薪嘗胆」、我慢するんですね。特にロシアが嫌がったんですね。なぜなら、ロシアは満州を狙ってましたから。日本が中国の満州とかを取っちゃうと、嫌なんです。それで日本を牽制するということになりました。

まあ日本の外交、日本の国民は、「俺達は一生懸命国際法を守り、ちょんまげも切って、鹿鳴館で社交ダンスを学んで一生懸命欧米の国と同じようにやろうとしているのに、お前らはなぜ俺達を差別するんだ？」という、強烈な思いがあったわけです。そういう思いの中で、パリ講和会議で「人種差別撤廃」、「人種平等主義」というものを掲げて。今国連、国際連合ってありますよね。戦前には国際連盟というのがあったんですが、この国際連盟の憲法に、それを書き込んでくれと言った。ところが、オーストラリア、アメリカ、皆却下です。「駄

目だ」と。「やっぱり白人が偉いんだ」と。「何を言ってるんだ。人種平等主義なんて、夢物語みたいなことを言うな」ということで、却下されちゃうんですね。これもやはり、当時の日本人にしてみたら、非常に傷つくわけですよ。「自分達は一生懸命、ある意味では西洋の真似をして同じようにしてきたのに、井戸までは連れて来てくれるけど、水は飲ませてくれない。何だ、こいつらは」と。こういう一種の屈折した気持ちがあって、第二次世界大戦にどんどん突入してしまったと私は思います。だから、そこまで日本の歴史を理解しないとイケないと私は思うんです。ただ、「侵略した」「悪かった」…これも認めないとイケないと思いますよ、もちろん。実際にそうですから。侵略もしたし、いろんなひどいこともしたけれど、じゃあなぜそうしたのかというと、日本というのは一生懸命世界の中で、自分達の国家の物語である「どんな国でも我々は対等に付き合おうんだ」という思いでやってきたのが、毎回差別されてね。「この野郎…」という、こういう鬱屈した気持ちで暴走してしまったということですね。

それで、12) にありますように、満州事変…そして国際連盟を脱退しちゃうんですね。もう世界を皆敵にしちゃうわけですよ。もう誰一人友達がいなくて支那事変に突入して、最後にはアメリカとの戦争に巻き込まれてしまうと。

…もう時間が来てしまいますので、13) から簡単に行きますと、戦後も、同じような思いで天皇陛下は五箇条の御誓文という、明治時代に宣言された国の方針というものをもう一回再確認を国民と一緒にされるんですが、まあやっぱり戦争の反動でね、戦後っていうのは国家の物語というのが非常に薄くなって、あまり継承されていない状況になってきました。

最後の ○ のところに行きますが、従って、今「北朝鮮けしからん」とか「中国けしからん」とかね、「韓国けしからん」とか、いろんな意見が出てきています。これは、「自分の国を意識する」という意味では私は肯定していいと思ってるんですね。今まであまりにも、自分の国家というものを意識してなかったのです。そういう意味ではいいと思いますが、情緒論、感情論に終わってしまうとえらいことになるということです。それはまさに先の大戦で一番反省しないといけないところで、何の戦略も無く、ただ「この野郎、俺が一番偉い」、そんなので突進して、敗戦という、日本の国民にとっては極めて大きな影響を及ぼすような失敗をしてしまったので。ここをやっぱり、非常に冷静に考えないといけないと思います。

一つは国家の物語。今申し上げたような、日本の物語というものを共有して、健全な愛国心を養うと共に、二つ目は、戦略をちゃんと作って、その戦略に基づいてやるということです。…例えば、靖国に行くとか、慰安婦の問題とか、これはいろんな考えがあっていいと思います。私も私の考えがあります。しかし、今中国を抑えるためには、アメリカとの連携が絶対必須、不可欠です。日本一国ではとても難しい。アメリカと日本というのは軍事同盟を結んでいます。アメリカと韓国も軍事同盟を結んでるんですね。だから当然この三ヶ国は、一緒になって行動しないといけないと私は思ってるんですね。だから、そういう時に「果たして、歴史問題をこちらからわーわー言うということは得策なのか。本当にそんなことに戦略があるのか」と。戦略があるんだったら別ですよ。アメリカも関係無い、他の国も関係無くて、それでも日本が中国を上手く対応できるような戦略があるんだったら私もそれに聞く耳を持ちますが、私はどう

ひっくり返ってもね、そんなものは無いと思ってますので。ここをやはり私達は冷静にしないとね、また昔の日本人みたいに、ただただ反動で、無謀なことをしてしまう恐れがあるので、そこだけは抑制しないといけないと思います。

以上、健全な愛国心はやっぱり自分達の歴史の中で、日本の国の物語は何なのかと。それは、「どんな国であろうと日本は対等に付き合っていくんです」ということです。もっと言えば、「世界秩序もそんな風になって、強い国、お金持ちの国が偉そうにするんじゃないくて、皆お互いを尊重するような世界というものを日本は目指してきた」と。ただ実は先の大戦で失敗をしてね。それは戦略が無かった、独りよがりになってしまった。そういう中で日本というものはずっとやってきたので、今後も、新しい課題である中国、北朝鮮、あるいは国内の財政問題。こういった問題に取り組む時にはやはり、「我々の先輩達がそういう立派な志を持ってやってきたんだ」と。「我々もそれを継承して頑張るんだ」と。そういうことを私は…本当はね、総理大臣なんかでもこういう話を国民にして、そういう思いを国民に喚起することが大事だという風に思っています。以上、今日のお話はこれで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

〈第2講終了〉